

ブドウつる割細菌病の生態と防除について

北海道立総合研究機構中央農業試験場 小松勉

はじめに

北海道は加工用専用ブドウ品種の栽培面積が全国1位となっている（農林水産統計「2012年産特産果樹生産動態等調査」より）。加工用の用途は、ほぼ醸造用であることから、北海道がワイン原料の主要産地であることを示している。また近年は、ワイナリーを舞台にした映画が制作されるなど道内各地でワイン醸造に対する関心が高まっており、醸造用ブドウは行政施策の面からも振興が図られている作物である。

2009年秋、道内各地の醸造用ブドウ産地において、果実が黒変し、やがて腐敗する症状が発生し問題となった。また、本症状が発生したブドウでは葉にハローを伴う黄色の斑点症状を呈し、その後病斑が拡大、融合し枯れ上がる症状が見られた（図-1）。加えて、新梢には黒いかいよう症状を伴う亀裂が多数確認された。本症状が見られた果実や葉の組織を顕微鏡観察したところ、細菌の菌泥流出が観察され、本症状は細菌による病害と疑われた。しかし、2009年時点で国内ではブドウにおける細菌病は確認されていなかったため、本症状と観察された細菌との関係は不明であった。一方、本症が発生した産地の多くにおいて、本症は *Phomopsis viticola* によるつる割病と疑われ、ベノミル水和剤などつる割病に対する薬剤散布も行われたが、防除効果は見られなかった。



図-1 ブドウつる割細菌病 葉の斑点症状

その後、本症状は、*Xylophilus ampelinus* による我が国初の細菌性病害「つる割細菌病」であることが新村ら（2012）により明らかにされた。本病原菌は1属1種の細菌で、ヨーロッパブドウ (*Vitis vinifera*) およびその交雑種のみにも病原性をもつとされている（EPPO, 2009）。

I 既発地域および被害

X. ampelinus によるブドウつる割細菌病は、ギリシャ、イタリア、フランス、スペイン、北アフリカ沿岸諸国等、地中海沿岸諸国で古くから発生が報告されており、南アフリカ、南アメリカや東欧各国でも発生が確認されている。一方、同じヨーロッパにおいても、アメリン&ウィンクラーによるワイン産地区分（4月1日から10月31日までの気温が華氏50℃を上回った日のその温度差の合計による）において北海道と同じリージョンI（0～2,500 F日：ブドウ栽培地域としても最も冷涼）に区分されているドイツやオーストリアでは発生が報告されていない。

本病による被害報告として、1940年に南アフリカ共和国において、ブドウの収穫量が70%以上減少し、フランスでは1968年にシャラント県の‘ブーシェ’と‘ユニ・ブラン’、ランドック県の‘ゲルナッシュ’と‘マカブー’で深刻な被害が記録されている（EPPO, 2009）。

スペインでは1978年にはじめて本病が確認されているが、発生地域ではその数年前から症状は出ていたものの発病が穏やかであったため見逃されていたと推察している。同国では1975～80年にかけて、激しい降雨が続いたため本病の発生に好適な条件となり、本病が甚発生した。1981年の実態調査では、カリニエナ地方のブドウ園21,000 haのうち、9,000 haで発生が認められており、うち80%以上の樹が罹病し収穫のなかったブドウ園500 haで樹が抜き取られた。しかし、1981～85年にかけては降水量が少なくなり、本病の発生は見られなくなったことが報告されている（LÓPEZ et al., 1987）。

フランスでは1993と97年に本病が甚発生した。特にコニャック地方とアルマニャック地方では‘ウグニ・ブラン’、‘コロンパール’、‘マカブー’、ディー地方では‘クレレット’で収穫量の減少が著しいと報告されている（RIDÉ, 2000）。

国内では2009年に北海道ではじめて発生が確認され

Ecology and Control of Bacterial Blight of Grapevine in Hokkaido.

By Tsutomu KOMATSU

（キーワード：醸造用ブドウ，つる割細菌病，越冬芽，銅水和剤）